



花吹雪

光原百合

おばあちゃんの部屋の窓から見下ろすと、以前と変わらず、斜面にはりついたような家々の屋根が目に入りました。あちこちに混ざった黒くて重そうな瓦屋根は、神社やお寺です。この町では、人間も神様も仏様も一緒に混ざって暮らしているように思えます。坂を下りきったところには、対岸の島との間に挟まれて、帯のように狭い海が青く光っているのも昔と同じです。

けれど、すぐ下のうちに植わっていた大きな桜の木がなくなったのは、寂しいことでした。空き家になって久しいうちでしたが、庭の桜だけは毎年変わらず花をつけていたのです。

「このあいだ、あのうちの取り壊しが決まって、桜も急に切られてしまうたんよ」
おばあちゃんがそう言いました。大学の春休み、おばあちゃんの看病を手伝いに母方の本家に行って来たわたしには、覚悟していたとはいえ、すっかり小さくなってベッドに埋もれている姿を見るのも寂しいことでした。

「もうすぐ春じゃのに。最後の花を咲かせたかったらうねえ」

おばあちゃんの視線の先の壁に、つばみを一杯につけた桜の木の絵がかかっていました。答える言葉を思いつかないまま、絵を見ている私に、

「ご近所の絵描きさんが、切られる前のあの桜を描いてくれちゃったんよ」

おばあちゃんはそう教えてくれました。風景の美しいこの町には、絵描きさんもたくさんいるらしいのです。

淡い水彩の、とてもきれいな絵でした。つばみばかりだと思っただけれど、近づい

てよく見ると、一輪だけ、ぽつと開いている花があるのがわかりました。

「一つだけ咲いてるわ」

そう言うと、おばあちゃんは窪んでしまった目を輝かせました。

「ああ、やっぱり咲きたかったんじゃねえ」

そのときは、意味がよくわかりませんでした。


数日後、本家の伯母さんがこしらえた
おかゆをおばあちゃんに食べさせてあげ
ながら、ふと壁の絵を見て、わたしは首
をかしげました。絵全体に、うすべいの
色が強くなっている……？ おばあちゃ
んの食事が終わってから、絵に近づいて
みました。

間違いありません。絵に描かれた桜が、
確かにこの間よりたくさんの花を咲かせ
ているのです。三分咲きぐらいの、内側
から輝きだすような色合いの桜でした。

「桜が咲いてる」

驚きのあまり間の抜けた言葉しか出な
かったわたしに、おばあちゃんは「ここ
のところ暖かかったからねえ」と、ごく
当たり前のように言いました。

花は日に日に開き続けました。



おばあちゃんには毎日来客があります。
おばあちゃんが痛い思い、苦しい思いを
していないか、気をつけてくれるお医者
さん。それにご近所の仲良したちも、お
ばあちゃんを疲れさせないように、ほんの
短いおしゃべりをしにやっつて来ます。

「きれいになつてきたなあ」

「ほんに、霞がたなびくようじやのう」

「もうじき満開じゃねえ」

絵の桜が咲くのを、みんな、当たり

前のように言うのです。この町ではこんな

ことも、ごく普通なのかもしれません。

桜が満開になった日、お坊様が訪ねてきました。おばあちゃんとはやはり、古くからの知り合いだということでした。

「もうすぐ散りますのう」

おばあちゃんのそんな言葉を、わたしは廊下で聞きました。わたしにはこのときも答える言葉が見つからなかったけれど、お坊様はこう言っていました。

「散るときは、そりゃあ美しい花吹雪じゃろう」

おばあちゃんは数日後、家族に囲まれて、
息を引き取りました。安らかな最期で
した。壁の桜の絵が、花びらをみな散
らせていることに、わたしは気づきま
した。おばあちゃんは花吹雪と共に逝っ
たのだと思いました。



2007.3.

S. Tamura